

キラリと輝く多摩の歴史・文化・自然・現在を記録し発信するフリーマガジン



*mico tama*

帝京大学総合博物館  
多摩のヨコガオ発見プロジェクト  
フリーマガジン 2023 第5号

**TAKE  
FREE**

残す・残る

跡として残る橋  
残す↓繋げる  
大熊さんがつくる剝製







特集 残す・残る

05 跡として残る橋

07 残す↓繋げる

くメタセコイヤとアキシマクジラの化石く

09 大熊さんがつくる剥製

特別寄稿

12 ラテン語と『ミコタマ』を

めぐるあれこれ

15 ミコタマ通信

16 編集後記

「ミコタマ」の名前の由来

ミコタマとは、ラテン語の「輝く」という意味のミコ (Mico) と多摩地域のタマ (Tama) を合わせた言葉です。キラリと輝く多摩の魅力を本紙を通じて記録し、発信したいとの思いを込めました。



特集

残す・残る

多摩地域には過去から今に引き継がれているものが  
たくさんあります。

建物、技術、物や自然……

それらは生活の営みとして受け継がれてきたものなのかもしれ  
ません。動物や植物によって残されたものかもしれません。  
気に留めていないだけで、

引き継がれてきたものは身近にもあるかもしれない。

そんな、何気なく生活する中で見落としてしまう

残っているもの、あるいは残そうとしているものを  
探してみたくなりました。





跡として残る橋

▲羽衣小橋の跡として残る高欄。しっかりと橋の名前が刻まれている

「生える」高欄

立川駅北口方面にある緑川通りの道路から橋の高欄※1のような物が飛び出ている。あたりには川もない。よく見てみると「暁橋」の文字が見える。何故ここに高欄があるのだろうか？

インターネットや本によると緑川通りには地下に水路があり、元々緑川という排水を目的とした人工の川が流れていたらしい。

なぜそのような人工の川を作ったのか。「立川の建物疎開の記録」によると、標高は北部の方が立川駅よりも高いため、駅前一帯に水が押し寄せ、人の膝のあたりまで浸かるような洪水被害が多発していたそうだ。また駅付近には陸軍立川飛行場があり、廃水処理する必要もあったことから、排水路を造ったらしい。

緑川の完成と改修

1943年に始まった排水路の掘削は、徐々に工事を終えた。完成した排水路は緑川と名付けられたが飛行場の廃水による悪臭被害などが多発した。

廃水の問題のなかには1950年と52年の緑川の火災があった。どうやら立川飛行場から航空機用のガソリンが川に流れ込んだことが原因だったようだ。1960年5月5日の立川多摩新聞には「流出するガソリンに火がついて燃える川として全国に話題を投げたものであった」とあり、当ても稀な事とされていたことがわかる。

悪臭被害や火災騒ぎなどから、緑川は地下へと場所を移され、上に道路や駐車場が設置されて、今の姿となった。なお歩く中で4つの「高欄」を見ることができた。

※1 橋からの転落を防止する柵





### 橋の跡から

高欄や緑川を調べても高欄が残された理由についての資料を見つけることはできなかった。しかしこれら4つの高欄が残った理由として、主に「近く児童公園があること」や交通安全上の理由が関係していると私は考える。

例えば「羽衣小橋」の隣には緑川第一公園が、「尺串橋」の隣には緑川第三公園が設置されているが、他の消えてしまった橋のそばに公園はない。また「暁橋」や「曙三丁目橋」では道の幅が非常に狭い上に通行の往来が多い。そのため交通安全面への観点などから残ったのではないかと思われる。

緑川通りの高欄にまつわる詳細は不分明、想像する他はない。しかし想像して楽しむことができるのはこうして残った物の醍醐味かもしれない。

### 「残る」を「残す」

これらの橋の跡はそれ以前までの街の姿を投影しており、今までに知らなかった街の一面を見つけるとができた。

しかし、事前に調べたときには5つの高欄が残っているとあったが、今回取材したときには、ひとつも無くなっていった。そのような過去を物語る形跡が徐々に忘れられてしまうのはなんだか寂しい。だから私は今に残るこの跡を記事として残そうと思った。そしてそれが軌跡となって残ってくれたら嬉しい。

加藤直樹(心理学科3年) || 文・写真・図

#### 〈参考文献〉

- 『緑川に覆蓋』『立川多摩新聞』1960年5月5日 P1
- 『立川の建物疎開の記録(立川の昭和史第一集)』P79〜101 立川市教育委員会 1996年

- 『羽衣町一丁目自治会 創立三十周年記念誌 羽衣橋』P14〜18 羽衣会 1977年
- 立川市の暗渠「緑川」―俺の居場所 <https://urban-development.jp/blog/search/midoririver/>

# 残す→繋げる

メタセコイアとアキシマクジラの化石

私が幼いころ、日野にある祖父の家の庭で貝殻を見つけたことがある。その時に、人類が生まれる以前はこの地域が海だったこと、それから多摩周辺では昔の人々が生活していた痕跡である貝塚が発見されていることを知った。教えてくれたのが祖父だったか祖母だったのかはもう覚えていない。

私が見つけた貝殻はどの時代に残された貝殻だったのだろうか。祖母が私に残した懐かしい記憶に触れつつ、私は地球が残したものを調べることにした。

知ってたけど知らなかった

地球が残したものを調べるに当たって思い浮かんだ場所、それが八王子にあるメタセコイア化石林だ。八王子市役所前の浅川は私がよく行く癒やしスポットの一つで、メタセコイア化石林がその近くにあることを知っていた。しかしふと思った。

メタセコイア化石林があることは知ってたけど、どういふものなのかよく知らないな……。

市役所の前から

JR八王子駅からバスに乗って八王子市役所前で降りる。浅川の河原はすぐそばだ。河原ではテントを張ったり犬と走り回ったりと、多くの人がそれぞれ好きなことをして過ごしている。私は暖かく晴れた秋の日に浅川に行くのが好きだ。秋には近くで「いちよう祭り」もある。

メタセコイア化石林に向かうため、市役所前から鶴巻橋を渡り、川沿いの土手を上流へ歩く。すると中央高速道路の少し手前にメタセコイア化石林の説明板が設置されている。それを確認しながら川の方へ近づくと地面の中に大きな木があちこちに埋まっていた。小さな木片でも石化しているため水に沈むらしい。八王子市教育委員会によって

設置された説明板によると、浅川のメタセコイア化石林は170〜200万年前のものだそうだ。

ここで疑問が出てくる。あれ、大昔は海だったと聞いていたけれど、200万年前は森だったの？

クジラがいた海

「海だった」ことについて調べてみたところ、まずはアキシマクジラの情報が出てきた。さらにもう少し調べてみたらなんとヒノクジラもいるらしい。自分が生まれ育った土地にクジラが泳いでいたなんて全く知らなかった。

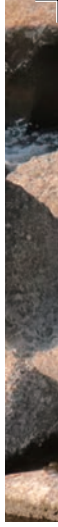
200万年前の昭島や日野が海だったことを、土の中に残された化石が現代の私たちに教えてくれる。

新種のクジラ

アキシマクジラの学名は「エスキリクティウス・アキシマエンシス」

※1メタセコイア：ヒノキ科の洛陽針葉樹。日本名はアケボノスギ





という。今まで世界で発見されていない新種であることが認められ、発見された昭島市にちなんで名付けられた。このクジラの化石はほぼ全ての骨の化石が発見されていて、全長約13.5mのレプリカが昭島市教育福祉総合センターに飾られている。実際に見に行ったが、骨だけの状態でもとても大きく、こんなに大きなものが地面から出てくるなんて、どんなわくわく感があっただろうかと想像させる。



▲今回取り上げた場所の地図

鼻骨の形、上顎骨や前頭骨の位置

置や形が新種と認められた決め手だったそうだが、これは全身の骨が長い年月を経ても損傷が少ないまま残されてきたからこそ、新種と認めることができたのではないかと思う。

ちなみにアキシマクジラはヒゲクジラ類であるコククジラの仲間の新種であるが、ヒノクジラはハクジラ類であるマッコウクジラの仲間であるようだ。

### 森と海

1961年にJR八高線鉄橋下からアキシマクジラが発見された当時は約500万年前のものとして推測されていたそうだが、しかし1999年に2.5km上流の拝島水道橋付近でアケボノゾウの足跡の化石が発見された。その足跡の化石が約170万

〜180万年前のもので、アキシマクジラの含まれていた地層がそれよりも新しい地層であったためにアキシマクジラは約160万〜170万年前のものと考えられるようになった。

170万年前、昭島辺りまでが海であり、海のすぐそばの陸域にはメタセコイアの森が、そして森にはアケボノゾウのほかサンバジカ、シカマシフゾウ、クセノキオンといった動物たちが生息していた。

2019年以降、上総層群から硬骨魚類の化石が多く出土しているそうだが、そしてその硬骨魚類は現在の東京湾や日本海近海に生息して

いる魚に通じているらしい。これからの新しい発見もとても楽しみだ。取材を通して、地球が残したもののから新しい発見を得たり、過去の生物の生きた環境を知ることができると古生物学に興味を抱きつつ、化石の保存に尽力する方々への尊敬の念が湧き上がった。

化石の保存は「残す」という役割が地球から人類にバトンタッチされたみたいだ。私もこの『ミコタマ』という雑誌で多摩の魅力を「残す」という役割を、これからの『ミコタマ』編集部の人々にバトンタッチしたいと思う。

寺澤頼来（心理学科4年）

加藤直樹（心理学科3年）



〈参考文献〉

多摩川足跡化石調査団『東京都昭島市の多摩川河床から産出したアケボノゾウ足跡化石の発掘調査報告書』昭島市教育委員会（2002）

※2 上総層群：房総半島から多摩丘陵に分布する地層  
 ※3 硬骨魚類：骨格が石灰質を多く含む硬骨でできている魚類

# 大熊さんがつくる剥製



堀越峰之(帝京大学総合博物館学芸員) || 文  
小島七菜(教育文化学科1年) || 写真

## 素材が先生

「おんなじことを毎日しつこくやっていると、それが教えてくれる。やってみないとわからない。」穏やかな声の主は、大熊義則さん。大熊剥製製作所を営む、八王子市内で唯一の剥製師だ。作業所の中は張り詰めた空気が漂い、剥製を作るための道具や作り終えた剥製が、整理され並んでいる。

帝京大学総合博物館を含む多くの博物館で、展示や保存されている剥製の多くは、大熊さんが手掛けたものだ。剥製を通じて普段は観察できない野生動物の体の細かい部分を見たり、現在では、見ることでできなくなってしまう動物の生きていた頃の姿を想像することができる。では、それらの剥製はどうやって作られているのだろうか。今回は大熊さんの仕事場にお邪魔して、剥製作りについて伺ったお話を、2回にわたってご紹介する。



▲ピンセットを使って、剥製の毛並みをそろえる。ここにどれだけ手を掛けられるかで剥製の良し悪しが決まる(2023年2月6日)

剥製作りは、痛んでいない素材を選んで作るのが本当はいいんだよねでも、うちはお客さんが持ち込んだ素材を使って作るから、そこは選べないんだよ。本来、「剥製」というのは死んでいる時点のまま保存し残すという事なんだよ。だからそこから精一杯、一所懸命やるだけ。

素材が手に入ったら、これ以上痛まないようにできるだけ早く処理することが一番大切だね。まず、肉や内臓、眼球など腐るものを全て取り除いて皮だけにして、残った皮が腐らないように処理をする。その下準備として、まず皮に付いている余計な脂肪を削り取る。それによって皮が薄くなり、防腐のための薬品がしみ込みやすくなるんだよ。でも皮を薄くしすぎると、毛をささえている毛根も削ってしまうことがあるので、注意しないといけないね。それが終わったら、防腐のため、皮に塩や、



ホウ酸、ミョウバンなんかをしみ込ませる。

防腐が完璧になったら、皮から取り出した肉などを見ながら、皮に入る詰め物を作っていく。例えば鳥の首は、首と同じ太さになるように針金の入った詰め物を綿と紐を使って作る。それを頭骨に固定して、皮をかぶせる。足や羽などのパーツも同じように作るんだよ。

皮に入れる詰め物は、取り出した肉と、同じ大きさ、同じ形に作らないといけない。そうでないと、皮に入らなくなるからね。だけど、剥製を作った事が無い人はこれが難しくできないんだよ。詰め物を大きくしちゃう。よく見てるつもりでも見えないんだよね。でも何度もやっていると同じものが作れるようになってくる。皮から出した肉なんかの素材が「先生」として教えてくれるんだよ。パーツを全部作ったら、それを元あった場所に入れてから、皮を縫い合わせて完成。そこからは、表現を

方法を考える。どんなポーズを取らせようか、微調整を繰り返すんだね。

### 特別な道具はないよ

珍しい道具は、皮の皮下脂肪を除去するための「セン刀」。これを使った作業を「セン打ち」と言うのだけれど、大熊流は「センがけ」と言っているね。あとは、狭い穴を開くための、ペンチのような道具。この名前は無いね。鍛冶屋さんに作ってもらった特注品だよ。珍しい道具はこんなもの。剥製作りをする人は昔から売っているものを工夫して使っていたんだ。専門の本には、メスを使



▲皮をなめす「セン刀」(上段)と狭い穴を開くための道具(下段)。これらは特注品だ(2023年2月6日)



▲大熊さんの使う道具は、ほとんど市販のものだ(2023年2月6日)

うなんて書いてあるけど、切れれば何でもいいんですよ。うちも色々使ったけど何とかなっちゃった。でも道具があれば簡単に剥製が完成すると思うのは間違い。使い込まないと駄目だよ。

### 普段から見ること

仕上げで大事なものはピンセット。凄くいい剥製はピンセットを使って時間をかけて、毛並みをそろえている。ただ単に揃えるだけじゃ駄目で、動物の毛の流れの特徴を再現しないといけない。でも毛並みなんか普段気にして見ないじゃない。普段から見えないと毛並みは再現できないね。

数年前まで中学生の職場体験を受け入れて、キジの剥製を作ってもらっていたんだ。1日目に、肉を取り除いて、骨のクリーニングをし、重要な皮のなめし(腐らないように皮下脂肪を取り、薬品で処理をする)を作業してもらおう。2日目は、頭や胴体、脚などの各部を製作して、全身を組み上げる。それができたら切開した箇所を縫合してもらおう。最後に剥製のポーズを自分で決めて成形してもらおうんだけど、そこでみんな困っちゃう。鳥が動いている姿を見えないから、どんなポーズをとらせたら良いかわからないんだ。いかに自分が普段から鳥を見てないか気が付くんだよね。

\*\*\*

剥製作りの考え方を丁寧に説明して下さる大熊さん。長年の経験から生み出される言葉に圧倒され、聞き入ってしまう。次号では、大熊さんがなぜ剥製師になったのか、剥製作りの仕事を通して何を感じたのかを紹介する。(つづく)

道の途中にある橋の高欄

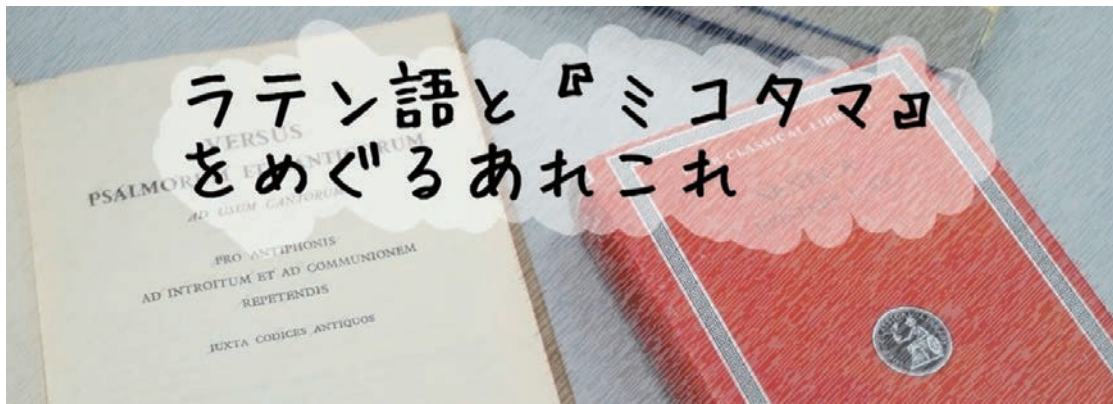
剥製の製作現場

森と海の化石

今回私達はこれらの取材を通じ、分かったことがあります。

それは、普段日常生活に潜んでいて気づかない残されたものの存在があることです。残されたものの存在があることで私達はその場所やものの歴史を知ることができることを実感することができました。みなさんは普段、身近な場所やもの、人について考えたことはありますか。きっとあまり気にしたことは無いと思います。この特集を読むことでみなさんも残すことの意味を考えてはどうでしょうか。





帝京大学総合博物館では、多摩地区の多様な貌や魅力を発見し、それを広く世の中に発信するため、年二回『ミコタマ』というフリーマガジンを発行しています。ところで、この冊子のタイトルの『ミコタマ』ですが、これは「多摩地域がキラリと輝くように」という願いをこめてつけられたものです。「キラリと輝く」—これはタイトルの「ミコ」という部分であり、しかもラテン語なのです。

「ミコ」は、ラテン語辞典で見出し *micō* (ミコー) をそのまま借用したもので、その不定形は *micāre* (ミカーレ)。*micō* は「私は輝く」を意味しています。なので、多摩地域が輝くように”ということであれば、接続法現在を使って *micet Tama*. (ミケト・タマ) としなければなりません(でも *micet Tama* より *micō Tama* の方が発音しやすいですよね)。

さて、本号の特集は「残す」。様々な視点や切り口での「残す」が、本号の編集と取材、執筆に携わった学生諸君によって、あざやかに紡ぎ出されています。その「残す」というコンセプトにラテン語をあてはめるならば、ラテン語はローマ帝国滅亡以降、数えきれないほどの知識人たちの努力と営為によって「残された」言語であり、またラテン語自体に内

在する力によって「残った」言語であると言えます。

生き残ったラテン語。なぜそこに拘るのかというと、往々にしてラテン語は「死語 *lingua mortua*」として扱われ、またそう誤解する人が日本では多いように思われるからです。たしかにラテン語が日常的に使われている代表的な場はヴァチカンの教皇庁であって、フランスやイギリスなどでは、学校の授業で接する機会はあるても、よほどのラテン語好きではない限り、日常的にラテン語が使われているとは言えません。ラテン語を死語と断ずる人たちは日常の使用頻度を尺度として、そう考えているのでしょうか。しかしラテン語は決して死語などではないのです。私たちの身近にあるラテン語がそれを証明しています。

アニメの「魔法少女まどか☆マギカ」。マギカは「魔術の」を意味するラテン語の形容詞 *magicus* (マジクス) の女性形 *magica* です。



#### ▲ミコタマのロゴ

タイトルの「魔法少女」は、この *magica* を踏まえた訳語です。ピデオはラテン語で「私を見る」を意味する *video* (ウィデオ) そのものです。北海道の札幌駅内にある大型商業施設「ステラプレイス」。ステラは星を意味するラテン語の女性名 *stella* (ステッラ) を拝借しています。ドイツの自動車メーカーの「アウディ」は、「聞く」を意味するラテン語の第四変化動詞 *audire* (アウディレ) の直説法命令形。このようにラテン語由来の施設名や作品名が、世の中にはたくさんあります。

前ローマ教皇ベネディクトゥス十六世が、自らの意志で辞任を表明したのは、2013年のことで、二世のケレスティヌス五世以来、実に719年ぶりの大事件でした。ベネディクトゥス十六世は辞任表明をラテン語で語ったのですが、ラテン語に精通していたイタリア人の女性記者が、教皇のラテン語を理解できた

ので、他国に先駆けて教皇辞任の報をスクープしたことは良く知られています。

フィンランドの国営放送局は *Nuntii Latini* (ヌンティイニー・ラティニー) というラテン語でのニュース報道を行っていました。『くまのプーさん』のラテン語訳、*Winnie Ille Pu* が出版されていることを御存知でしたか。日本の各種カルチャーセンターでは、ラテン語の講座が人気で、大勢の年配者が熱心に学んでいることは、かつてその種の教室でラテン語を教えていた高橋が自ら経験しています。日本語で



▲ラテン語訳の『くまのプーさん』※1

のラテン語文法書もここ20年で急速にその数を増やして十冊以上もあり、ラテン語の問題集も出版されています。

なぜ難解な古典語であるのに大勢のラテン語愛好者が、日本をはじめ世界各地にいるのでしょうか。ラテン語が名詞、動詞を中心に多くの活用を持ち、その活用形だけで主語、直接目的語などが一目瞭然となるその論理性や構造美が理由の一つに考えられます。例を挙げると、英語の *Rose* は、この形だけでは文中での役割は不明です。ラテン語の場合 *Rosa* (ロサ) は一本のバラが主語、*rosam* (ロサム) は一本のバラが直接目的語であることを明示し、これ以外の解釈を許しません。ここに数学と通底するラテン語の深さがあり、かく言う高橋も、幾何学や方程式を解く時の面白さをラテン語に見出した一人なのです。

しかしこれはラテン語の言語としての特徴にすぎず、それだけでラテ

ン語が愛されている理由を十分に説明できません。ラテン語が生き残り愛好されている理由は、ラテン語の普遍性にあるのではないのでしょうか。この場合の普遍性とは、ラテン語が近代諸語に与えた規範性のみならず、ラテン語が古代から人類の知的遺産を受け継いで現在に伝えて来た、という普遍性も意味します。既存の社会制度や価値観が崩壊していく中において、私たちが継ぐのは、歴史による選別を生き抜いて残った「普遍なるもの」です。その代表が古典の諸作品であり、古典の普遍的な真髓と価値を伝える表現様式をラテン語は担い、それをういて人類の知的遺産を残してくれたのです。

普遍的な様式美と形式美を持つラテン語を介して哲人たちは、人間が生きそして考える上での指針となる言葉を、古代以来、潤沢に残してくれています。次頁の吹き出しはプブリウスの『格言集 *Sententiae*』からの引用です。

※1 A.A.Milne(著)Alexander Lenard(訳)『Winnie Ille Pu』Penguin Books ; illustrated edition (1991)





Fidēs, ut anima, unde abiit, eō numquam redit.  
信頼というものは、魂と同様、一度立ち去った所には、二度と戻って来ない。

生きる上で信頼関係がどれほど大切であるかは、言うまでもありません。また中世のトマス・ア・ケンピスは『キリストに倣いて De imitatione Christi』の中で

sic transit gloria mundi.

「このようにして、地上の栄華は過ぎ去っていく。」

と語り、いかに現世での権力、富、名声が虚しいものであるか、を教えてくださいます。この二人の言葉の中には、彼らの時代から現代そして未来に渡って、受け継がれて「残って行く」であろう「真理」が残されているのです。

いつまでも変わらずに残り続けるものを、進歩がない、古臭い、時代に則さない、と行って簡単に切り捨てられる風潮が、とみに日本では高く思われます。

しかし一歩立ち止まって考えると、私たちは変わらずに残り続けて

いるものに安心と安らぎを見出しませぬ。先述した古典と向き合いたい、そして、できればそれらの古典を、分かる範囲で構わないので、少しでもラテン語の原文で味わってみたい——ラテン語が「死語」どころか、永遠の生命を宿す「生き続ける語」であることは、多言を要さないところです。

多摩の魅力再発見をお届けする『ミコタマ』のタイトル説明が、ラテン語をめぐる「あれこれ」にまだ話が広がってしまいました。皆さんもラテン語の魅力を、自分流で発見されてはいかがでしょうか。

高橋裕史（帝京大学総合博物館

館長・経済学部教授） 〓 文

小島七菜（教育文化学科1年）

〓 写真・デザイン

取材協力

山崎柚夏（文学部史学科2年）

▼高橋先生と編集部員



## 📖 ミコタマ SNS のフォローはこちらから!



Twitter ユーザー名 ↓  
@Teikyo\_Micotama



instagram ユーザー名 ↓  
teikyo\_micotama

Twitter と Instagram を開設しました。刊行のご連絡や本誌設置場所の告知、記事で使用されなかった写真の掲載等をしていきます。SNS を通じて読者の皆様にミコタマをさらに身近なものに、また、私たちの活動をより深く知っていただける機会を上げていきたいと思ひます。ぜひフォローをよろしくお願ひいたします!

## 📖 アンケートへのご回答をお願いします!



アンケートの URL ↓  
<https://forms.gle/sQ3kmTX8EHNcP5ow6>

本誌の読者の皆様からご意見・ご感想を受け付けています。本誌をより良い記事にするため、また、皆様との繋がりをもちたいとの思ひからアンケートを作成しました。アンケートの回答時間は最短で1分程度です。

上記の QR コードまたは URL からぜひご回答をよろしくお願ひいたします!

## 📖 ミコタマ5号配送について

この度、ミコタマ5号から配送を開始することとなりました。ご希望の方がいらっしゃいましたら帝京大学総合博物館までご連絡下さい。(送料のご負担をお願いいたします。)

### 帝京大学総合博物館

多摩のヨコガオ発見プロジェクトフリーマガジン『ミコタマ』編集部  
〒192-0395  
東京都八王子市大塚 359 番地  
TEL 042-678-3675  
E-mail [museum@teikyo-u.ac.jp](mailto:museum@teikyo-u.ac.jp)

## 📖 本誌の編集について

本誌『ミコタマ』は、帝京大学総合博物館(帝京大学八王子キャンパス内)で展開中の「多摩のヨコガオ発見プロジェクト」の一環として作成しています。プロジェクトについては裏表紙をご覧ください。

本誌の企画・取材・文章執筆・デザインは、帝京大学総合博物館の指導のもと、すべて帝京大学に在籍する学生が中心となって行っています。

### 帝京大学総合博物館について

本館は2015年9月に帝京大学八王子キャンパス内に開館した博物館です。

帝京大学の持つ貴重な学術資料や最新の研究成果を、展示や講座などを通じて社会に広く公開しています。どなたでも入館できます。ぜひお越しください。



## 編集後記

### 「思い出の物」



残っていた秋期のテストやレポートが終わり、時間ができたので部屋の掃除も兼ねて模様替えをしました。すると幼い頃に母から譲り受けた「星の王子さま」を見つけ、掃除や模様替えのことなどすっかり忘れて、ついつい読んでしまいました。そうしたら覚えていた内容と全然違って驚きました。当時は読んで「ふーん」くらいの感想しか出て来なかったのに、なんだか心がしんみりするような思いがありました。それは自分がいろんな経験をしたり、成長したりしたからなのかはわからないけど、昔の自分と今の自分を比べることのできるものがあるというのはいいな、と思いました。(加藤直樹)

スニーカーを履いた時に紐を結ぶことが億劫だと感じる事が多々あります。そんな時に私はよく陸上の投擲シューズ(スローイングシューズ)を思い出します。中学生から高校生までの約6年間陸上の円盤投げと砲丸投げを続けてきましたが、このシューズを毎回履くときに次の試合では良い結果になりますようにと願掛けしながら紐を結んでいました。今考えると不思議とこのシューズの紐を結ぶときは結ぶことを億劫だと感じませんでした。それは私がこのシューズに願いを託していたからだと思います。託した願いが叶ったときも叶わなかった時もありましたが、どんな時も一緒に戦い続けてくれたシューズに感謝したいです。(荒井涼花)



#### 表紙写真

大熊剥製製作所にて撮影。素材の腐敗防止のために暖房を付けずに作業をしている大熊さんの姿は、その寒さもあいまってピンと張り詰めたような、厳かな雰囲気がありました。(2023年2月6日)



### 帝京大学総合博物館 多摩のヨコガオ発見プロジェクト

帝京大学八王子キャンパス周辺の自然、文化、歴史、現在に関する魅力を、帝京大学総合博物館が調査したことをもとにして広く社会に紹介するプロジェクトです。

「赤駒を 山野に放し 捕りかにて 多摩の横山 徒歩ゆか遺らむ」(万葉集)

放牧してある赤駒を捕まえることができなくて、険しいという「多摩の横山」を(防人に赴任する夫に)歩かせてしまうことになったよ。

この歌は、奈良時代に編まれた「万葉集」の歌の一つです。「防人」として武蔵国を離れて九州に赴任する夫を妻が気遣った歌です。「多摩の横山」と呼ばれる場所は、ちょうど帝京大学八王子キャンパス周辺にあたります。丘陵が、横に長く連なる様子を当時の人々は「多摩の横山」と呼びました。万葉集の頃の「多摩の横山」の面影は、現在は少なくなりつつあります。ですが、しっかりと目を凝らしてみると過去の面影を感じ取ることのできる場所が残っています。そして、それらの場所には過去から現在までの人々の営みが連綿と続いています。このプロジェクトは「多摩の横山」に残された自然や文化、歴史、そして現在の人々の営みに光を当てて紹介するものです。普段は何気なく通り過ぎて気がつかない魅力あふれる「横山」ならぬ「多摩のヨコガオ」を探して記録し、社会に発信していきます。

